様式2　**令和7年度　清瀬市立清瀬第四中学校　学校評価**　　資料　指ー1③

学校教育目標　人間尊重の精神に徹し、自己の能力伸長と人間形成に努める人を育成する。

創造　温情　実践　健康

目指す学校像(ビジョン)

【目指す学校像】　夢や志をもち、教養と品格を備え、自分で考動し未来を切り拓く生徒

【目指す児童・生徒像】　教育公務員としての使命を自覚し、熱意と向上心に溢れ、教育のプロとして主体性を発揮する教師

【目指す教師像】　保護者・地域から信頼され、誰もが通いたい・通わせたいと思う学校

育成を目指す資質・能力及び特色ある教育活動

【引き出し、育成・定着を目指す力】
〇読み解く力、書く力、聞く力、計算する力、表現する力、体力等所謂「認知能力」
〇主体的に考動する力、対話・協働する力、諦めず学び続ける力等所謂「非認知能力」
〇命を大切にする力、他者を認め助け合う力、国や地域を愛する力等所謂「多様性」
【特色】キャッチフレーズ:「ESDの四中」、体験・経験を重視した活動による非認知能力の育成

前年度までの学校経営上の成果と課題

【成果】朝読書・朝学習への取組、SDGs学習への取組、校内研究授業＆協議会の計画的実施、教員主体によるステップタイム(校内フリースクール)対応の実現
【課題】人材育成(教師力の向上)、働き方改革、自ら考え動く・風通しの良い組織風土、特別な配慮を要する生徒対応の充実

柱	具体的方策	自己評価 評価 取組指標	自己評価 評価 成果指標	自己評価 課題及び次年度以降の改善方策(案)	学校関係者評価 学校関係者による「自己評価」についての評価	次年度以降の改善方策 学校関係者評価の結果を踏まえた改善方策
確かな学力の向上	〇OJTの推進、校内研究(OKJへの取組)の計画的な実施 〇授業規律の徹底、意図的・計画的な朝学習の実施、読書活動の活発化	4	3	〇校内研究ではOKJの年間6回の研究授業、管理職招待授業を実施。生徒の肯定率「授業ができる・わかる」80%だが、生徒同士の相互説明が不足しているため、OKJ授業の基本形を実践する。 〇学習環境づくりとして授業規律5か条を設定。生徒肯定率「授業規律」95%、朝学習への取組88%、個人差が見られる。	〇校内研究の推進が見られた。OKJの理解と定着には時間を要することから、教科の特性に応じた運用が課題。個に応じた支援の充実と学習成果の可視化が必要。 〇授業規律の徹底、朝学習・読書の充実が見られた。新聞に触れる機会として、活用の意義は大きい。 〇行事や体験活動を通じた表現力等の育成が図られている。支援本部による支援も強めたい。 〇学校で高めた意欲を家庭学習の定着につなげられるよう、情報発信や連携が必要。 〇「生徒主体」の取組と保護者が参観できる機会づくりに期待。	〇教職員が「OKJ＝教えて考えさせる授業」の指導技術を習得し、わかる授業を実践する。教職員同士の学び合いを通して、生徒の授業への満足度を向上させる。 〇新入生を対象に、保護者参加型のグループエンカウンターやレクリエーションを通した集団づくりを行い、学習環境づくりを新たに進める。 〇生徒に行事等の企画に参画させる。実施後は振り返りや発表を行い、保護者へ参観を呼びかける。 〇ミライシード等を活用し、家庭学習と関連付けた課題を提示し、家庭学習の定着につなげる。 〇CSや学校支援本部による支援体制を生かし、保護者の参加や参観する機会を設ける。オンライン等を活用した成果の共有を今後検討する。
	〇行事等の工夫による主体的活動機会の創出 〇事前事後学習等におけるプレゼンの実施 〇清掃・防犯活動、地域探訪、職場体験、職業講話等々	4	4	〇行事への取組は良好、生徒の満足度は高い。教職員肯定率:行事への取組94%、地域貢献88%、生徒:行事91%、 〇課題解決に向けた提言発表(3年)など新たな機会を創出。 〇地域人材の活用、地域との協働を推進。保護者が関わる機会が少ない。		
豊かな心の育成	〇生徒が主体性を発揮する機会の創出	4	3	〇教職員:主体性の創出94%、生徒:主体性の発揮81%、 保護者:主体性の発揮60%。保護者の評価が20%以上低い。 生徒が自己決定する場面づくりと情報発信を行う。	〇生徒の主体性を発揮する機会が見られる一方、保護者から大人の介入について危惧がある。安全確保等に対する指導スタンスの共有が必要。 〇教職員の観察・連携により、いじめ防止の取組は着実に進んでいるが、過去の事案に対する説明不足がある。 〇年度始めからの信頼関係づくり、生徒が相談しやすい環境整備、保護者に指導の意図や対応過程が伝わるよう、丁寧な説明が求められる。	〇心理的・身体的安全性を確保できるよう、配慮事項の確認や、情報共有を徹底する。学年だよりや学校HPを活用し、行事や学習のねらい、生徒の成長を定期的に発信する。 〇生徒への支援・指導に対する教職員間の連携力を高め、保護者に適時適切に対応し、信頼感の向上につなげる。 〇生徒が自ら関わりやすい雰囲気づくり、声かけ、関係づくりを進める。アンケートを活用した早期対応の仕組みの強化、保護者・関係機関との連携の実施する。
	〇教職員の連携力・観察力の強化による未然防止 〇アンケート調査による実態把握と対策の協議	4	3	〇教職員:いじめ等への連携・観察94%、生徒:いじめ防止95% 生徒との関わりを深め、未然防止と早期発見対応に取り組む。 〇新たに心のチェックシートを導入(2学期)。生徒の学校満足度等に着目し、教職員全体で生徒支援に取り組んだ。		
健やかな体の育成	〇教職員による率先垂範(生徒の見本となる)	4	3	〇教職員の肯定率:生徒の見本88%、使命の自覚と発揮94% 生徒:生活習慣91% 保護者:教員の挨拶マナー等74%、お子さんの挨拶等88% 保護者から教職員の発言(人権感覚)に対する指摘があった。	〇生徒に寄り添った対応は、一定の信頼を得ている。教員間の対応差や人権意識に関する指摘が課題。 〇食育や生活習慣の指導は栄養士・給食業者との連携のもと成果が見られている。残さい率低減に向けた取組に期待。 〇防犯・防災意識、体力向上の意識が高い水準で、自己管理能力につながっている。生徒との信頼関係と情報発信を大切に、過敏になり過ぎず指導にあたってほしい。	〇教職員が生徒の見本となる意識の向上、相互点検の日常化。定期的な研修による人権意識の向上。 〇食育では栄養士と給食業者との連携を継続し、教室間のおかわり調整など、残さい率低減の仕組みを検討する。 〇CSを中心とした市防災課と連携した防災訓練の実施、セーフティ教室や引き取り訓練における保護者・地域との協働を推進し、防災や安全に対する対応力を高める。
	〇体育・保健教育及び食育を中心とした日常的に運動に親しむことの必要性を理解する力の育成 〇健康・安全及び防犯の重要性を理解させることによる健全に生活できる力の育成	3	4	〇食育講座や専門委員会による食に関する放送等を通して食育を推進、給食残滓率2%減。給食室内の衛生管理等が大きく向上。 教職員:運動に親しむ態度59%、生徒:体力の維持80%。 〇家庭と一体となった生徒の健康安全について推進が必要。		
特別支援教育の充実	〇全教職員一体となり、生徒・保護者に寄り添い個に応じた指導、発達支持的生徒指導の実践 〇関係機関との積極的な連携の推進	3	3	〇教職員:生徒理解88%、生徒:多様性への理解81% 保護者:特別支援教育26%(「よくわからない」が約7割) 保護者への情報発信と啓発の強化が課題。 〇関係機関との連携強化は不登校減少、教室復帰等の成果につながっている。	〇概ね良好な評価で、組織的な対応が機能していると考える。ICTの更なる活用を含めたよりきめ細かな個別支援の充実が必要。 〇外部機関との連携により、組織的な支援が進んでいる。 〇「教職員の職場環境づくり50%」というところは、もう少し改善が必要。 〇薬科大との連携にも期待。 〇教員アンケ不登校支援への意識が100%、外部人材活用が88%と高く、手厚い支援体制の構築が進んでいる。	〇ICTを活用した在宅での学習、校内フリースクール、教育活動支援員による個別支援等個に応じた柔軟な支援を実施する。 〇学習・福祉・医療等の支援を関係機関と連携し、孤立を防ぐよう組織体制を強化する。 〇ICT活用による校務の効率化、外部人材の活用、校務分掌・分担の見直しによる校務の平準化等を推進する。 〇日本社会事業大学をはじめ他大学との連携拡大を検討する。 〇不登校担当による個別の学習支援や居場所づくり、教職員への研修を通して、生徒の「学校とのつながり」の意識を高め
	〇全教職員一体となる指導体制の構築 〇日本社会事業大学等外部人材との連携強化 〇不登校担当の活用	3	4	〇教職員:自身による職場環境づくり50%と低い。 〇大学生のボランティア参加と、配慮や支援の必要のある生徒に対する教育活動支援員を新たに2名配置。 〇不登校率4.5%→2.1%に半減。個別の学習支援の充実が課題。		
本校の特色	〇地域貢献や感謝心が体現できる活動の実施 ・小中連携活動、職場体験、職業講話、校外学習等の行事等への取組の推進	3	3	〇教職員:小中連携の取組65%、総合・地域貢献88% 生徒:小中連携の意識76%、地域との連携意識70% 今年度、小中連携や地域貢献に新たな活動を多数実施。特に生徒会を中心とした取組が充実した。全体の意識向上に反映しきれていない。	〇小中連携や職場体験、地域と関わる行事は概ね定着し、生徒の肯定的な受け止めが高い。教員の負担に配慮しつつ、CSの特性を生かした協働を進め、保護者を巻き込んだ活動を通して連携を深めたい。 〇ボランティア活動への参加が90%と、社会貢献への意欲が高いのが強みである。保護者、地域の方々がより活動しやすい現場づくりが課題。 〇図書館の福袋企画など読書推進の工夫も評価できる。朝読書での共有や図書室の居場所機能の活用が期待される。	〇CSが主導する連携行事や、取組が多数計画されている。担当教員を中心に、教職員全体で保護者・地域との協働に取り組む。 〇支援本部と連携し、保護者・地域が参加しやすいよう、募集方法や運営を見直す。活動の成果を通信やHPで発信し、継続的に参画意識の向上を図る。 〇CSと連携し、図書館の地域開放、生徒の図書館利用の拡大、読書好き生徒の育成を図る。
	〇各種ボランティア活動、防災活動等の実施 〇図書館の利活用の拡大	4	3	〇教職員:ボランティア等94%、生徒:ボランティア等90% 生徒会がより良い環境づくりを目的に、学運協や青少協、地域団体と協働した取組を新たに行った。 〇図書館の地域開放や子ども食堂の運営など、生徒が自ら地域と協働する活動を、学運協が組織的に支える体制を作った。		